

〔実践報告〕

多人数クラスにおける アクティブラーニングの工夫

——初年次教育科目「アカデミックスキル」における授業実践——

橋 本 信 子
藤 田 里 実

目次

- 1 本稿の目的
- 2 対象科目の概要
 - 2-1 「アカデミックスキル」の概要
 - 2-2 教員の協働による授業運営
 - 2-3 学習記録カードによる出欠管理とふりかえり
- 3 「アカデミックスキル」の授業内容
- 4 ペアワーク、グループワークの実践方法
 - 4-1 グループの編成方法
 - 4-2 読解力トレーニング（ペアワーク）
- 5 成績評価方法と学生の自己評価
- 6 まとめ

キーワード：初年次教育 アカデミックスキル アクティブラーニング ペアワーク
グループワーク

1 本稿の目的

大阪経済大学（以下、本学）経営学部で2022年度に新規開講された初年次科目「アカデミックスキル」の授業実践を報告する。この科目は、大学で学問を修めるうえで必要となる傾聴力、読解力、思考力、文章力などの育成を目的に、①大学1年次で身につけるべき学習リテラシー（大学の学習支援システムの使い方、講義の受け方、情報整理術、レポートの書き方、プレゼンテーションなど）、②経営学部で学ぶ上での基礎スキル（問いの立て方、経営学の文献リサーチや引用の方法など）を学ぶ。経営学部一年生は全員受講するものとなっている。本科目の授業内容や実践方法は、長年にわたって初年次教育科目やアカデミックスキル、アカデミックライティング指導に携わりノウハウや知見を蓄積してきた教員陣が、その蓄積を活かしつつ、本学学生と本学経営学部のカリキュラムに合わせて練り上げたものである¹⁾。開講から2年4期を終え、その実践から見えてきたことは、初

年次教育はもちろん高等教育現場における授業運営、特に多人数科目における参加型授業の質の向上をはかるうえで参考になる点が多いと考える。なお、藤田・橋本（2024）においては、学生たちはこの授業から何を学び、どのような力を獲得したと捉えていたのか、学生の学びの内実を学生の視点から詳細に分析している。本稿で報告する実践の有効性を確認できるものとなっているので、併せてお読みいただきたい。

2 対象科目の概要

2-1 「アカデミックスキル」の概要

「アカデミックスキル」は、本学経営学部1年生が春学期に全員履修する科目である。あらかじめ教務部がランダムにクラス分けをして受講曜限を指定しておくため、学生は半強制的に履修する形となる。ただし必修科目ではなく、不合格になっても卒業できなくなるわけではない。とはいえ、2022年度以降に入学した経営学部生は原則全員がこの科目を履修していることを前提としてカリキュラムが組まれている²⁾。秋学期には2部学生対象のクラスを設けている。受講は任意である。2部はクォーター制（2コマ連続、8週目の1コマまでの15回）のため、秋Ⅰ学期と秋Ⅱ学期にそれぞれ1クラス開講している。2022年度は秋Ⅰ学期17名、秋Ⅱ学期23名、2023年度は秋Ⅰ学期17名、秋Ⅱ学期19名が受講した。開講学期や強制力は異なるもののシラバスや授業内容は同一であり、実施状況や学生の声にも大きな差異はなかったため、本稿はすべての開講クラスを対象としている。

「アカデミックスキル」は、前述のとおり、①大学1年次で身につけるべき学習リテラシー、②経営学部で学ぶ上での基礎スキルを学ぶことを目的としている。授業形態は、座学と、手や身体を動かしたり議論したりする学生参加型をおおむね半々とした。毎回1つのテーマ（大学で学ぶうえで必要・有用なスキルやツール）を取り上げ、個人ワーク・ペアワーク・グループワークを組み合わせる課題に取り組んでいく。90分の授業の流れは、その回の予定とねらい、前回のふりかえりとフィードバック、読解力トレーニング（約10分）、講義と実践（ワーク）、授業の終わりに文章力トレーニング（約10分）というパターンとした。その回のテーマによっては多少流れを変えることもあるが、このパターンをほぼ毎回繰り返すことによって学習を習慣化し、スムーズな授業運営をはかった。文章力トレーニングについては第2章3項、読解力トレーニングを含むペアワーク・グループワークについては第4章で詳述する。

1) 本稿の文責は著者2名にあるが、本稿で報告する「アカデミックスキル」の教材開発、授業運営、分析対象とした学生に対する調査の収集は、辻晶子経営学部講師、北村徹非常勤講師との協働で進められた。

2) そのため秋学期には再履修者対象のクラスを設けている。再履修者向けクラスを受講するかは完全に任意である。2022年度に2クラス開講したが全登録者が10名に満たなかったため、2023年度は1クラスのみ開講とした。

2-2 教員の協働による授業運営

開講初年度は、本稿著者2名を含む専任教員3名が計9クラス（1クラス50-70名程度、計564名）を担当した。2年目となる2023年度は、学部定員増によって入学者が700名に近づく見通しとなったため、11クラス開設し（1クラス50-90名程度、計692名）、非常勤講師1名に2クラスを担当していただいた。

初年度の担当者3名が決定したのは、前年（2021年）の11月である。シラバス提出期限の12月中旬までの間に、対面で1回、オンライン会議やメールによる相談を数回重ねて、全15回の流れや授業内容の選定をおおむね済ませた。各回の教材は、3名がそれぞれ5回ずつ教材のたたき台を作成し、遅くとも2週間前に共有した。これをオンライン会議で詳細に検討し、たたき台作成者が加筆修正して授業の1週間前には完成版を提供するというサイクルを続けた。教材を担当する回は必ずしも順繰りではなく、各教員が得意とするテーマや既に教材を持っているテーマにした。毎週のオンライン会議では終了した回のふりかえりも行った。初年度は、学年暦の関係で曜日によって2週ほどずれて進んだので、オンライン会議での検討事項は4週分ほどの内容を扱うときもあった。

2023年度は前年度の内容をほぼ踏襲し、マイナーチェンジにとどめたが、新規に非常勤講師に加わったもらったため、やはり2週に一度ほどのオンライン会議とメールでの相談や授業報告を重ねた。さらに、互いの授業を見学したり、授業の補助に入ったりすることもあった。

複数教員が同一科目を複数クラス担当する場合、授業内容や評価基準の統一のため、事前事後の相談が欠かせない。時間的な負担が大きいことは否めないが、三人寄れば文殊の知恵の言葉のとおり、教員間でアイデアや工夫を共有することで、より洗練された教材が出来上がったり、一見困難に思えたことが克服できたりすることも多々ある。そのことはクラス間の平準化、公平性を促進し、授業の質を向上させる。また、教員間で情報共有や相談ができることで、担当者の精神的な負担が軽減される利点もある。教員間に密な連携と信頼関係が構築されていれば、受講者にとってはプラスの面が多いと思われる。

2-3 学習記録カードによる出欠管理とふりかえり

学生参加型授業を謳う本科目においては、授業への出席と積極的な参加がもっとも重要となる。本学では学生証のICチップで出欠を記録するシステムがあるが、学生証を忘れたり記録することを忘れたりする学生も散発する。そこで、本科目では毎回の「文章力トレーニング」を兼ねて授業のふりかえりを記録する「学習記録カード」を導入した。

学習記録カードは、三重大学で開発された「大福帳」と呼ばれる個人別のカードを参考にしたもので、A4の厚紙両面に15回分の欄をあらかじめ印刷している（図1）。授業開始時に受講生に返却し、授業終了前にふりかえりを自筆で記入する。学生によって文字数に差はあるが、一回分の欄には、平均的な大きさの字で1行に25文字前後、4行で100文字前後は記入できる。その回に学んだ内容をまとめたり、演習の感想を書いたりするには程よい分量である（図2）。本科目では、「文章力トレーニング」の一環でもあったので、何

があれば授業に取り組んだことが確認できる。授業前に出席記録だけをしておいて教室からいなくなるわけにもいかない。授業開始から一定時間経過した頃に、残ったカードを回収して「欠」等のマークを消せない筆記用具で書いておき、それ以降に來た学生には、ふりかえりの時間にカードを渡せば遅刻の記録にもなる。公共交通機関の遅延等やむを得ない事情がある場合は、カードにその旨を記載するよう個別に指示する。他の学生の遅刻や退室に強い不快感を抱く学生もいるので、そうした行為を把握している姿を見せておくことで彼らの不満や不信を未然に防ぐこともできる。しかし、必要以上に遅刻者を委縮させてしまえば、当該学生のみならず、他の学生にとっても精神的な負担となりうる。遅刻をしてもなんら問題ないとは思わせず、かつ速やかに授業に合流できるようなルーティンを決めておくことは良好な学習環境を維持することに役立つ。

3 「アカデミックスキル」の授業内容

2022, 2023年度に授業で取り上げたテーマは表1のとおりである。ただし、完全な一回完結方式ではない。前回までに実践したワークを下敷きにして別のテーマを学ぶ回もある。

表1. 「アカデミックスキル」授業内容

No.	主題 ／Theme	内容 ／Contents
1	オリエンテーション	この授業の目標・方法・約束を理解する
2	ノートテイク	大学の講義の受け方を知る
3	問いと仮説	経営学の問いの立て方を知る
4	情報収集①	資料の探し方を知る/図書館活用方法を知る
5	情報収集②	データベースの活用方法を知る/参考文献一覧の書き方を知る
6	批判的思考	「批判」とは何かを知る
7	発想①	マインドマップを作成する
8	発想②	ブレインストーミングの方法を知る
9	情報整理	情報の整理方法を知る
10	ディスカッション	議論の方法を身につける
11	レポート	大学のレポートの書き方を知る
12	プレゼン①	プレゼンテーションソフトの使い方を知る
13	引用	引用の方法を知る/注の付け方を知る
14	プレゼン②	プレゼンの技法を身につける
15	15回のふりかえり	アカデミックスキルに関する理解を確認する

全15回の授業は、5回ずつ3つのパートに分けられる。第1回から第5回には、主に授業の受け方と情報収集について学ぶ。「正しい答え」の出し方を学ぶことの多かったそれ

までの受動的な学習から、自分自身の問題意識やテーマを見つけて追究していく主体的な学びへと転換していくことを意識づける大切なパートである。ノートの取り方、図書館探索、データベースを使った情報収集、出典の書き方といった実用的なスキルも学ぶ。

このうち、図書館探索は教室内で完結するものではないため、特に事前の計画が重要になる。大学図書館の蔵書の多様さと配置の仕方を知るためには実際に足を運ぶことが必須であるが、一度に数十名の学生を引き連れて見学するのは現実的ではない。好きなように見てくるだけとか、適当な言葉で検索して本を探してくるだけでは、行かずに済ませたり、仲間同士で答えを写し合っただけで済ませたりしてしまう恐れもある。そこで、「アカデミックスキル」では、図書館の協力を得て、本科目オリジナルの図書館探索シートを開発した(図3)。

アカデミックスキル第4回課題

学籍番号 () 氏名 ()

図書館探索シート

問題① 書架を見て探す

図書館内には、色々なコーナーがあります。別紙の探索課題の左の2つの欄に書かれた場所に行き、図書または資料を1つ選んで、以下の項目をメモしてください。

所在	請求番号 (背ラベル)	キーワードで検索した図書の基本情報
所在 棚番号		タイトル : 著者(編者) : 出版社 : 出版年 :
好きなページから一文を抜き書きしてください 何ページか忘れずに書きましょう () ページ		

問題② 図書館蔵書検索システム (OPAC) で検索して探す

- OPACで、別紙の探索課題の右端に書かれたキーワードを含む図書を検索してください。
- 開架にあり、利用可能と表示されている図書をひとつ選び、所在、棚番号、請求記号、基本情報を、下記の欄に記入してください。
- 図書館に行って、実物を手に取って、どこか好きなページから、一文を抜き書きしてください。ページ数も忘れずに。

所在	請求番号 (背ラベル)	キーワードで検索した図書の基本情報
所在 棚番号		タイトル : 著者(編者) : 出版社 : 出版年 :
好きなページから一文を抜き書きしてください 何ページか忘れずに書きましょう () ページ		

助け合ってもいいですよ
でも大きな声は
出さないでくださいね

閲覧が終わった資料は、
棚の横にある返却台に
乗せてください

教室に 時 分までに戻りましょう



図3. 図書館探索シート

図書館探索シートには1枚のシートに次の2つの課題を書き込むようにしている。1つ目は、書架を回って資料を見つけるブラウジング課題である。ブラウジングとはぶらぶら見て回ることであるが、学生が狭い範囲に固まらないよう、見に行くコーナーを指示した「短冊」をシートとは別に配る（例：図4の左と中央の欄）。2つ目は、OPAC（図書館蔵書検索システム）で検索した本を見つける課題である。こちらも同様に、学生ごとに検索ワードを「短冊」に指定し（例：図4の右欄）、行き先がバラバラになるようにする。「短冊」に記すコーナーと検索ワードは図書館に選定してもらった。2023年度の場合、図書館内のコーナー18ヵ所、開架に該当する書籍が複数冊配架されていることが確認できている検索キーワード44件を組み合わせた。そうすると1クラスに90名近くいても、2問とも同じ課題が当たる学生が出ることはない。さらに、どちらの課題も、見つけた本の書誌情報と、その本の任意の一文とページを書き抜く欄を設けて、実際に足を運んで本を手にとらないとできないようにした。このように各自で取り組まざるを得ない課題にしておきつつ、お互いに助け合うことも奨励し、騒がないよう注意をしたうえで図書館へと送り出した。

テーマ展示(生物・映画)	棚番号1F 1/2022春テーマ展示【映画】・ 【生物】	資本主義
--------------	---------------------------------	------

図4. 図書館探索時の指示を記した「短冊」の一例

かなり駆け足の実習にはなったが、この回の学習記録カードには、大学図書館の蔵書の多さ、面積の広さ、システムティックな資料の配置方法に驚いた様子や、居心地の良い空間を発見できた、空き時間に利用したいという感想が記された。第15週目（最終回）のふりかえりの記述からも、図書館探索の経験が図書館やOPACの利用を促したことが読みとれる。一部を紹介する（2022年度のふりかえり調査より原文ママ）。

- ・図書館の蔵書検索の仕方は実際に本を探す時に使用した。
- ・この回の講義を受講してから、図書館を利用する回数が増えた。
- ・授業で図書館の利用について学び、実際に空きコマなどで活用している。
- ・図書館の使い方というテーマの時の作業が役に立ってほかの授業のレポートで図書館がしっかり使えたので良かったです。

ただ、この実践では、図書館に滞在する時間が30分ほどしかとれないため、「短冊」に指示されたコーナーと検索ワードで見つけた資料が配置されている書架付近を回って終わってしまう場合も多い。2024年度以降は、滞在時間を増やし、館内をくまなく回るような方法に改良することを検討したい。

第6回から第10回では、批判的思考、アイディアの拡散と収束、協働学習の体験（ディスカッション、ポスターセッション）に取り組む。このうち第7回から第10回は、後述するように、グループで連続して一つのものを作っていく形を採った。本科目の開講に当

たっては、学生が主体的に学び、自分で「問いを立てる」ことができるようになってほしいという期待があった。経営学部的一年生向けの科目であるので、経営学部での専門的な学びへの関心を高めたい。そこで、次章で詳述する「読解力トレーニング」で使う新聞記事や、「問い立て」を学ぶ際の例も経営学を学ぶ動機付けとなるよう配慮したが、第7回から第10回のグループワークは、実際に起業を志す学生だけでなく、多くの学生に「経営学部っぽい」と好評を得たので詳しく紹介する。

この4回の授業では、「自分たちの大切なこと・もの・こだわりを守る／広める／作るための起業プラン」をグループ（4名程度）で協働して作るワークを行った。まずは一人で、続いてチームで、マインドマップやブレインストーミングを使ってアイディアを出し合い、それらをKJ法で論理的に整理し、その成果を他者に提示してディスカッションするという流れである。

連続してグループワークに取り組んでいると、話し合いが低調になったり、アイディアが収束していなくなったりするグループも出てくる。モチベーションの維持には工夫が必要である。そこで、3週で起業プランはいったん形（KJ法で作ったポスター様のもの）にしてしまい、4週目には他のグループと「合併、買収または提携交渉をする」という設定にした。「他社」（他のグループ）との交渉は、半数が他社に出向き、半数は自社に残って別の他社を迎えるという体裁である。すなわち、1人か2人で「他社」と交渉に当たることになる（写真1）。さすがに誰もフリーライダーではいられない。しらせ気味だったり、黙りがちであったりした学生も取り組み姿勢がきめんに変わった。このシリーズを実施した回の学習記録カードのふりかえりには、自己や他者をよく観察できている報告があふれた。いくつか例を挙げる（2022年度の学習記録カードの記述より原文ママ）。

- ・他グループとの交渉や自社の説明などを通してつめが甘かった所や良かったことなどが気づきました。7回からの授業を通して1つの事業を立ち上げ、成功させるには1人の力ではなく多くの人の意見が大切だと感じました。
- ・フォーマルなディスカッションを通して、本当に企業のプレゼンをしてみたい！と強く思うことができました。第7回から今を通して「自分の意見を練り温める」ということを学びました。また、他者の意見を前向きに検討し、事業を吟味することを学びました。
- ・他者のグループの意見を聞き、あるものを掛け合わせたりすると、より良いものが生まれると分かった。ブレインストーミングやKJ法などで意見を出したりまとめたり、整理する力をつけることができました。

この一連のワークは、担当教員にとっては、準備も、気をもむ要素も多かったが、結果的には予想以上に肯定的な反応が得られた。他者との協働学習は初年次生にとって達成感や成長を感じられる学習方法であることを確認できたシリーズであった。

第11回から第15回では、主にアウトプット（レポート作成、プレゼンテーション）に関



写真1. グループワークの様子

わるスキルを学んだ。本学には日本語表現系の科目が他にも多数開講されているので、本科目では、主にアウトラインの作り方や引用をするときの注意に重点を置いた。ふりかえりの記述を見てみると、今までレポートに何を書くかがわからなかったのが役に立った、レポートをどう書いていくかがわかって良かった、引用の仕方がわかっていなかったのが学べて良かったといった記述が多数見られたことから、学生のニーズに合致していたと考えられよう。学生の声から一部紹介する（すべて2022年度のふりかえり調査より全文ママ）。

- 問いの立て方を学んで、レポート課題が出た時に自分で問いを立てて書いていくことが出来た
- 期末になりレポートが沢山出ましたが、レポートの書き方を学んだのでいつもよりも早くレポートを仕上げる事が出来た。テーマを具体的にすることの大切さを感じた。
- レポートなどを書く際に、参考文献の書き方がとても役に立ちました。いままで、なんとなくで出していたので、日付や著者などは一切気にも止めていませんでした。外部のアイデアコンテストなどに応募しようと思っていたので、アカデミックスキルでルール知ることができて良かったです。

4 ペアワーク、グループワークの実践方法

本科目の最大の特徴は、ペアワーク、グループワークを毎回必ず行ったことである。具体的には、毎回の授業開始時の「読解力トレーニング」（10分程度）と、各回のテーマに応じて設けたグループやペアでのワーク（30～45分程度）である。他者と共に学ぶ体験をしてほしいということが一番のねらいではあったが、1クラス当たりの受講者数が多く、教員による個別指導や添削は時間的に困難であるため、それを補うという現実的な問題の解決という面もあった。グループワークに不安を抱く学生も多いのではないかと懸念

もなくはなかったが、その心配をよそに、非常にスムーズに、かつ熱心に取り組む姿が見られた。藤田・橋本（2024）で分析しているように、ペアワークやグループワークによってコミュニケーション力が向上したとふりかえる学生は非常に多く、本科目で取り組んだことのうち、もっとも反響が大きかった。本章でその方法について詳述する。

4-1 グループの編成方法

本科目は1クラスの人数が多いため、教員が学生の交友関係や気質などを考慮して編成するのは困難である。そのため、グループ編成は偶然性に基づき、機械的に決まるようにした。初回は、全員参加の簡単なゲームで席を決定し、その後2回程度のグループ替えにおいても偶然性の強い方法で席を決めた。例えば、学籍番号末尾の数字で縦一列に並んで座るというような方法である。しかし、たまたまか、図ってか、初年度は、2回目のグループ替えの際、友人同士で同じグループになっていたところがあったらしく、「もっと友達と知り合いたい（原文ママ）」ので、友だちで固まることないように厳格に席を指定してほしかったという声が出た。逆に、偶然、同じメンバーと続けて同じグループになった別の学生からは、「あまり知っている人を増やせなかったので、席替えの仕方をもう少し工夫してほしい」という声も出た³⁾。自分たちだけメンバーが変化しないのは不利益を被っているように感じたいらしい。

2022年度の本学教育・学習支援センターによる授業評価アンケートでは上述のように、5件ほどではあるが、もう少しグループ替えを多くして、より多くの人とグループを組みたい旨の意見が出た⁴⁾。とはいえ、これだけではグループ替えの頻度の最適解は測れないので、ふりかえりの記述等から丹念に学生の声を拾ってみたところ、初めて知り合う学生とグループを組むことへの文句はなく、むしろ授業で多くの他者と接する機会があることを肯定的に捉えていることが確認できた。ただし、それは、偶然性に基づくルールに則って機械的にグループに割り振られること、そのルールは教員から厳密に指定されること、そして全員がまんべんなく混ざり合うことが要件なのである。そのような「平等」「公平」「公正」性に、本学学生は敏感であることが見てとれた。

なお、この傾向は初年次生の春学期のみに見られることではないことは、筆者らが担当した秋学期の科目でも観察できている。筆者らは「アカデミックスキル」の発展科目の位置づけで、秋学期にそれぞれ「経営学特殊講義」の枠内で「資料活用のスキル」「聞く力」という科目を担当している。前者は大学生が活用すべき多様な資料を使って、発表、対話、討論する力を養うことを目的とし、後者は傾聴力・質問力などの育成を目的として、アクティブラーニング主体の授業をしているが、学年に制限はないので1年生から4年生以上の学生と一緒に学んでいる。そこでも、いろいろな学生とグループワークを経験することで学べたことが多かったという意見が多い。別の機会にあらためて詳細に分析、紹介でき

3) 両者とも教務部による匿名の授業評価アンケートの記述より。

4) 2023年度は、試みに橋本が担当するクラスではグループ替えを4回に増やしたところ、もう少し長く同じグループで組みたかったという声が1件出た。

ればと考えている。

4-2 読解力トレーニング（ペアワーク）

本科目で毎回必ず行っていた他者との協働学習は、読解力トレーニングと称したペアワークである。この学習方法は学内外で実践報告をした際に特に反響があったので方法を紹介する⁵⁾。

読解力トレーニングは、教員が用意した2本の新聞記事をペアで分担して読み、相手に口頭で要約を紹介するというものである⁶⁾。ペアは4人グループのなかで組む。グループ内でペアが組めない場合は、クラス内で融通し合ってペアを作る。出席者が奇数のときには、教員が聞き役になるなど適宜対応する。回数を重ねるにしたがって、教員がいちいち指示しなくても、相手のいない学生どうし、アイコンタクトをとってペアを組めるようになる。そうした学生の動きをその都度褒めて、授業運営への協力に対する礼を口にしていくと、ペア編成はさらにスムーズになっていく。遅刻すると非常に目立ち、クラス全体に迷惑がかかることが明白であるので、本科目は遅刻できないという意識も高まったようである。

新聞記事は、経営学部初年次生の学習意欲を喚起するようなものを各教員がそれぞれ選んだ。取り上げられた記事は様々で、例えば、新しいアイディア商品や起業（家）の紹介、著名人の学生時代や若い頃についてのインタビュー記事、授業内容と深く関わるもの（生成AIとの付き合い方、アイディアの拡散と収束に関するもの、心理的安全性、非言語コミュニケーションについての解説記事）などがあった。ときには教員間で記事を提供し合うこともあった。2年目は非常勤講師に加わってもらったこともあり、授業準備の省力化、授業内容の一層の平準化、授業内容とのさらなるリンクを図って、教員間での記事の共有を進めた。

読解力トレーニングに使う記事は、序盤はごく短めにし、慣れるにしたがって多少長いものも用いた。黙読してまとめる時間は、記事の長さに応じて調整する。たとえば学生が初見に2分程度かかりそうな記事であれば、4分のあいだに読んでまとめる作業をするよう予告し、一斉に作業を開始する。もっと長くかかりそうな記事であれば時間を伸ばすが、あまりに長いと集中力が途切れる学生が出てくる恐れがあるので、4～5分くらいで読んでまとめられる記事が程良いように思われる。時間になったら黙読を止め、ペアで交互に1分間で記事を紹介する。要約を披露する時間は常に1分にしている。1分という長さでどれくらいのことを話せるのか、時間感覚を体で覚えていくためである。学生は長い記事の方が読むのもまとめるのも大変だと思いがちだが、実はそれらは必ずしも字数に比例し

5) 初年次教育学会第16回大会（於山梨学院大学）2023年9月8日自由研究発表および本学全学FD委員会主催2023年度第1回FDサロン「効果的な初年次教育のための共創サロン～教職員の挑戦と交流の場～」2023年12月1日。

6) グループで4つの記事を分担して読んで互いに紹介したり、データベースで各自が見つけた記事をグループ全員に紹介したりする回も設けた。

ない。文体や内容によっては長くても要約しやすい記事もあれば、その逆もある。何度もトレーニングしていくうちに、そうしたこともわかっていく。観察をしていると、回数を重ねるうち、1分で話しきれるよう要点をつかみながら読むことができるようになっていく様子が見てとれた。同輩に要約を話すというアウトプットが課されているワークで記事を読もうともしない学生は（皆無ではないが）そうはいないので、授業への集中力を高める良い導入となった。

学期を通してのふりかえりにおいても、読解力トレーニングによって読む習慣がついた、まとめる力がついたという肯定的な意見を確認できた。さらには、このトレーニングに言及している学生の多くが、これを協働学習として位置づけ、コミュニケーションスキルの向上に役立ったと評価していることがわかったのは、教員からすれば瓢箪から駒のような成果であった。その点に関しては、藤田・橋本（2024）も参照していただきたい。

なお、読解力トレーニングに限らず、何らかのワークを行う際には、あらかじめ時間を設定し、そのなかでやり終わられるよう意識させる方が集中力もワークの質も上がることが見てとれた。そのためには適切な時間配分を設定することが肝要である。それには、授業内容を詰めていく段階で、教員も時間を計ってやってみることをおすすめしたい。例えば、読解力トレーニングであれば毎回ストップウォッチで計って読んでみる。図書館探索であれば、実際に使う教室からシートを持って図書館へ行って、館内で実際に課題に取り組み、教室に戻るまでの時間を分単位で計ってみるのである。そうすれば、このワークを学生が取り組んだら何分で多少慌ただしいができる・ゆとりをもってできるといった見通しが、かなり正確に立てられる。そうしておけば、数十名の新入生相手に実施しても、まず大きな支障なく授業を進めることができるのである。

5 成績評価方法と学生の自己評価

「アカデミックスキル」の成績は、平常の取り組みを総合的に評価することとし、定期試験や期末レポートは課さなかった。ペアワークやグループワークを多用した授業であったが、それらへの取り組みや成果をもって個人の成績を評価することは難しい。学生がペアワークやグループワークに積極的に取り組み、学習成果を実感できるようにファシリテートするのは指導する側の責任でもある。幸い、授業中の学習態度やグループとしての成果物はいずれも問題のない水準を保っていたので、成績は、個人で取り組んだ「学習記録カード」の記述や重要度の高い成果物（レポート作成のためのアウトラインの立て方のワークシート、プレゼンテーションスライド等）を基に算出することにした。成績判定の基準も担当教員で合議のうえ統一した。なお、2022、2023年度の出席率は、クラスごとに多少の差はあったものの、平均して9割程度、合格率も90%強であった。

重要な成果物のひとつとしたプレゼンテーションスライドについても興味深い発見があったので説明しておきたい。プレゼンテーションのテーマは、「本科目を新入生に説明し、不安を解消し、学習意欲を喚起するもの」とした。本科目で学んだことを筋立てて再構成し、どのような学びを得たかを表現してもらう課題としたのである⁷⁾。このワークは、

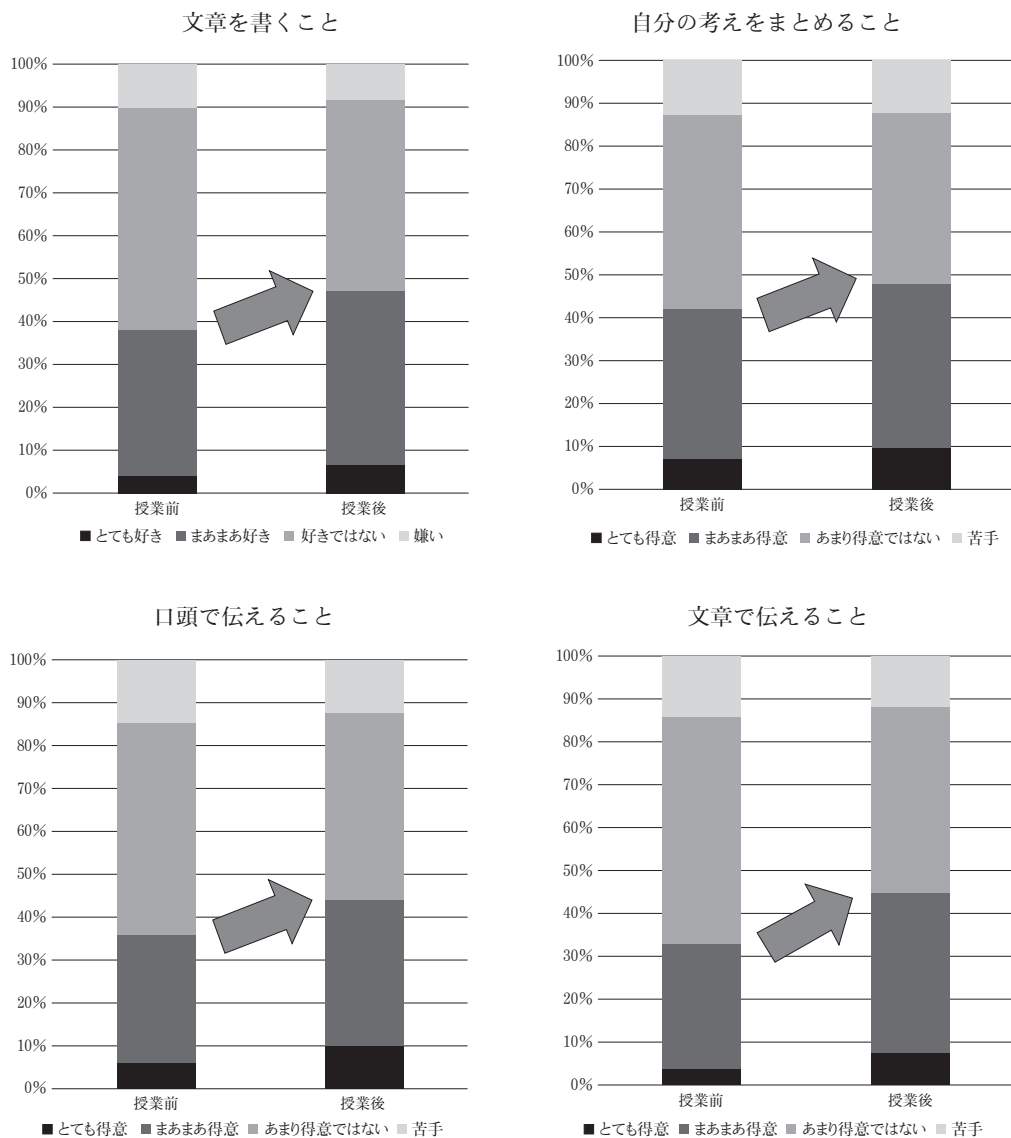


図5. 受講生の学習スキルに関する意識の変化(2022年度)

直前に学んだレポートのアウトラインの立て方を応用するというねらいもあったので、取り上げる項目や順番は学生が自分で考えた。すると、見事にどの学生もグループワークやペアワークを本科目の特徴として取り上げ、それらによってコミュニケーションスキルが

- 7) プレゼンテーションはまずはグループ内で行った。そのあと自薦他薦で、より多人数の前で行う機会も設けた。クラスによっては数名が全員の前でプレゼンテーションすることもできた。学習記録カードや事後調査の記述からは、多人数の前で発表した学生が大きな自信をつけた様子がうかがえた。

向上したと言及したのである。さらには読解力トレーニングがコミュニケーションスキル向上に役立つと紹介する学生も少なからず見られた。どうやら教員の予想以上、想定外に学生は他者との協働学習を好意的、肯定的に捉えているらしいとわかったのである。

プレゼンテーション課題で見出された傾向は、最終回にグーグルフォームで回収したふりかえり調査（事後調査）においても見てとれたため、より精緻な分析を試みることにした。その方法と考察は藤田・橋本（2024）で論じることとして、本稿では、事後調査の選択肢による回答から、学生がどのような力を伸ばせたと感じているかを報告しておく。

本科目では初回授業時に、大学入学以前の学習経験や、学習に関する苦手意識等を尋ねる事前調査（546件、回答率96.8%）を行った。授業最終回の事後調査（回答数501件、回答率88.8%）では、後者について再度尋ねた。その結果、初年度の調査では、以下の点で肯定的な変化が見られた。「文章を書くこと」については、肯定的な答え（「とても好き」「まあまあ好き」）が39%から47%に増加、「自分の考えをまとめること」は「とても得意」「まあまあ得意」が42.9%から48.3%に増加、「口頭で伝えること」については「とても得意」「まあまあ得意」が35.7%から43.8%に増加、「文章で伝えること」は、「とても得意」「まあまあ得意」が33.2%から45.2%に増加している（図5）。いずれもt検定で有意差を確認している。

これらは、毎回の授業で、文章を書くこと（学習記録カードへのふりかえりの記入）、グループワークやペアワークで考えをまとめ伝えることを繰り返し行ったことが定着したと考えられよう。

6 まとめ

以上、2022年度開講初年次科目「アカデミックスキル」の授業実践について紹介した。教員の連携と図書館の協力に支えられた授業運営によって、50名から89名という大所帯でアクティブラーニングを多用した学生参加型の授業は、学生に肯定的に受けとめられ、一定の効果を確認することができた。最後に、本授業実践から得られた、他の授業でも応用可能な Tips 三点をまとめる。一点目は、「反復」の重要性である。本授業では、ペアワーク（読解力トレーニング）、講義、グループワーク、ふりかえりといった授業の全体的な流れを固定し、反復していた。これにより学生は毎回の授業内での見通しを持つことが可能となり、教員からの指示も最小限にすることが可能となった。このことは学生の「自信」構築にもつながったと思われる。授業の流れはある程度固定し、反復させると効果的である。二点目はグループワークの際、グループをどのように編成するかである。初年次においては特に、強制性がある方が学生にとって取り組みやすい。また高学年であっても、知人どうしよりも多様性がある程度確保できるグルーピングの方が新たな発見にもつながりやすく、フリーライダー出現も避けうる。三点目は「限定」の重要性である。特にワークをさせる場合、時間・目的の明確化は活性化につながる。ゴールを明示し、細かく分数で区切ることが効果的である。そのためには準備段階で教員が所要時間を実際に体感しておくことが有効である。以上、ご参考となれば幸いである。

参考文献

- 織田揮準（1991）「大福帳による授業改善の試み—大福帳効果の分析」『三重大学教育学部研究紀要．教育科学』（42），p.165-174
- 橋本信子（2018）「多人数講義におけるアクティブラーニングの実践 —政治学的なものの見方を養う—」『同志社大学学習支援・教育開発支援センター年報』（9），p.20-30
- 藤田里実・橋本信子（2024）「初年次教育科目における教員の意図と学生の学習意欲—振り返り記述からの探索的分析—」『大阪経大論集』75(1)，p.85-97
- 藤原由美（2021）「アクティブ・ラーニングによる多様性適応力の成長 大学におけるコミュニケーション教育のグループワークを対象として」『日本創造学会誌』No.24, p.184-195
- 森常人（2016）「大学生のコミュニケーション能力向上のための基礎的研究 グループワークとプレゼンテーションの事例より」『関西外国語大学研究論集』104, p.129-138
- 森朋子（2009）「初年次における協調学習のエスノグラフィ」日本教育工学会論文誌33(1), p.31-40